

沙漏

〔一宮巡詣記上〕夫より富士の山へ登らんと志し、吉田町にて用意などして、山路に趣き侍る。大日
 す、原を通り、御室の大山積の社へ参り、夫より中宮へまふで、かま岩の茶屋にとまると、本より
 草木もなき山の岩屋なれば、かたしく袖の夜半の嵐に、目もあはで堪がたかりし、明れば廿日、此
 にて日の出を拜みけるに、心もすみていとたうとし、安座巡行を勤加筆安座加筆しては、儒者の正座の如く、
 なり、巡行とは安座久しければ、却て心身を苦しむるゆへに、時々立て左めぐりに廻り、又安座す
 るなり、されば土計とて板に小き穴をあけ、その上へに砂を盛り、その板の下に鉢を置いて、漏る
 は能く安座を修し得たりとなり、鼻の先に木綿をのりにてちよとつけて、息のあらく成を慎橋
 なり、練橋氣

〔文藝類纂六學志〕時辰儀

按ずるに、又沙漏あり、其制亦西洋に出づといへども、是亦支那創制の者あり、○中我國にも近
 古までありしと見えて、享保年間刻稗子中に、卷首断て、書名を詳にせ、縫實際に只助六と題す、猫兒跳て沙漏を翻し、時
 を誤るの文ありて、其圖、今の櫓時計の如く、中邊より砂の翻れたるを畫けり、

〔明史二十五〕分野

明年嘉靖八年、天經又請造沙漏。明初詹希元以水漏至嚴寒水凍輒不能行、故以沙代水、然沙行太疾、
 未協天運、乃以斗輪之、外復加四輪、輪皆三十六齒、厥後周述學病其竅太小而沙易墮、乃更制爲六
 輪、其五輪悉三十齒、而微裕其竅、運行始與晷協、天經所請、殆其遺意歟、夫制器尙象、乃天文家之首
 務、然其精其術者、可以因心而作、故西洋人測天之器、其名未易悉數、內渾蓋簡平二儀、其最精者也、
 其說具見全書、茲不載、

〔中山傳信錄一〕更定更法

海中船行里數、皆以更計、或云百里爲一更、或云六十里爲一更、或云分晝夜爲十更、今問海舶夥長、
 皆云六十里之說爲近、